

contents

- 1 特集鼎談
これからの住まい
住宅団地ストックの課題
深尾 精一 首都大学東京 都市環境科学研究科 教授
岡部 明子 建築家 千葉大学大学院工学研究科准教授 環境学博士
村山 邦彦 独立行政法人都市再生機構 理事長代理

- 7 UR Project
住棟単位での
改修技術の開発
ルネッサンス計画

- 9 混ぜればゴミ
分別すれば資源
ゼロエミッションへの挑戦

- 10 樹の心を
次の世代に伝える
グリーンバンクシステム

- 11 海外の団地再生 ヨーロッパの事例 ご紹介

- 13 都市の情景
街が記憶する 栄光の住まいと暮らし
金岡団地 (大阪府堺市 1956) スターハウスメモリアル

- 15 連載 “いま光る” 都市を訪ねる 第10回
都市景観を見据えたまちづくり
南の拠点都市 鹿児島市
西村 幸夫 東京大学大学院 都市工学専攻教授

- 17 シリーズ 街が甦るミュージアム ⑧
芸術文化都市
さっぽろのシンボル 札幌芸術の森

- 19 メッセージ
都市の住まいの原点 団地の暮らし
向井 亜紀 タレント

- これからの住まい「住宅団地の課題」
光井 純 ベリ クラーク ベリ アーキテクト ジャパン代表
光井純&アソシエーツ建築設計事務所代表

- 21 UR TOPICS / 編集後記

特集 鼎談

ていだん

これからの住まい

住宅団地ストックの課題

“住宅団地が生んだ団地” 功績と評価

村山 昨年、住生活基本法が成立して本格的な住宅ストックの時代になりました。私は昭和44年という深刻な住宅不足の時代に日本住宅公団に入りましたから隔世の感があります。最近では団地マニアという人も出てきましたね笑。

岡部 団地マニアですが、学生たちの間では、住宅都市整理・公団というサイトが有名ですね笑。生活感のない、洗濯物が見えない建物の背面の写真を並べたサイトで、なぜこれが学生に響く、建築の学生などには大変興味を持っています。私は都市計画の最初の授業で、生まれは都市が農村かと聞くのですが、手はパラパラしか挙がりません。しかし、郊外かと聞くと7・8割の学生が手を挙げます。いまの都市政策は郊外に少し批判的ですが、学生たちのふるさとは郊外で、彼らなりの価値を見いだそうと団地マニアのサイトに共鳴するのです。

深尾 私の大学でも団地の再生をやりたいというニュータウン育ちの学生が出てきています。今後は真剣に考えていますね。

村山 草創期の団地は都会に出てきて働くための装置というイメージでしたが、いまでは自分が育った環境が熟してふるさととなったので、それらの評価は大事でしょうね。

深尾 精一

ふかお せいいち
首都大学東京 都市環境科学研究科 教授
東京大学工学部建築学科卒業
同大学院工学系研究科建築学専攻博士課程修了
東京都立大学工学部助教授、教授を経て現職
日本建築学会作品選奨、論文賞など受賞
工学博士
著書に「建築構法計画」(共著 鹿島出版会) など多数



村山 邦彦

むらやまくにひこ
独立行政法人都市再生機構 理事長代理
北海道大学工学部卒業
1969年 日本住宅公団入社
都市基盤整備公団東京支社長
独立行政法人都市再生機構
本社業務企画部長
理事を経て 現職



岡部 明子

おかべ あきこ
建築家 千葉大学大学院工学研究科准教授
環境学博士
東京大学工学部建築学科卒業
磯崎新アトリエ (バルセロナ) に勤務
東京大学大学院建築学専攻修士課程修了
堀正人とHori & Okabe, architectsを設立
著書に「サステイナブルシティー-EUの地域・環境戦略」
(学芸出版社)、「持続可能な都市」(共著 岩波書店) など

深尾 私は、昭和49年から住宅公団の仕事をお手伝いするようになって、大量供給のあと、どつ質の良い住宅を造るかに取り組みました。住宅は工学の成果として造られますが、街は結局のところ時代がつくります。その時代の街で育った人たちがこれからのあり方を考えるべきなのでしょうね。

村山 自分自身に鞭打つての反省ですが、団地というのは住宅の標準設計で、すべての住宅が同じように利用できることが前提でした。その場合工夫できる余地は住棟配置やプレイルット、そこにしか個別的な造り方はなく、大量供給団地も最初はふるさととは思えなかった。しかし年月を重ねるうちに工夫を凝らした部分にいまでは豊かな緑が育って、団

地マニアの写真でも良い景観になっていきます。でも同じような形態の建物が並んでいるのでは評価されません。その団地が将来にわたって使われるには、現状と住んでいる方の考えの把握が不可欠と考えています。

深尾 住宅公団が反省する必要はないのですよ。当時は郊外に住宅をという国民の望みに応えるために効率的に造る方法を考えていたのであって、儲けるために画一化してやり易くしようとしたわけではありません。オランダのジョン・ハブラーケン先生は、60年代初めに警鐘を鳴らしてはいましたけど、それは本当に見識のあるごく一部の方の意見で、大勢の人は当時その方策を支持していませんでした。だからいまは逆にそのストックを大いに活用しなければいけません。地球環境からもスクラップアンドビルドはやめるべきというのひとつの考えですけど、その当時の職員が一生涯命造ったものを活用できないでどうするんですか。

ニコラス・ジョン・ハブラーケン
マサチューセッツ工科大学 (MIT) 名誉教授
デルフト工科大学で建築を学び、アイントホフ・ヘン工科大学建築学教授などを経て、MITで教育・研究にあたった。
1962年に出版した「サポーター・マスマスハウジング」に代わるもののおかげで「サポーター・インフィル」の概念を提唱

岡部 住宅公団が果たした役割は非常に大きいですね。世界の大都市の多くは都市化によってスラムが出来ましたが、東京や大阪ではスラムが生まれなかった、そのリーダーシップは住宅公団がとったのではないのでしょうか。

村山 ストックの現状ですが、住宅の面積と量は、昭和40年代が平均45㎡で